

現場の苦勞談

アジア歴史資料センター調査員の手記

アジア歴史資料センター調査員チーム

1. 調査員について

アジア歴史資料センターのオフィスの奥に、私たち調査員の作業室があります。部屋の中央に長方形に並べられた机の上には7台のPCが置かれ、これを参考資料・文献を積み上げた書棚、画像データの記録された膨大なCD-ROMを収納した大きなロッカーが取り囲んでいます。私たちはここで、それぞれに割り当てられたPCに向かって日々の作業に挑んでいます。

この部屋で現在作業に携わる調査員は7名です。メンバーは、それぞれ、日本近代史、中国近現代史、東南アジア近代史、そして西洋近代史という様々な分野で歴史学を学ぶ、大学院生やその修了者によって構成されています。このような少人数編成による作業体制は、平成15年の4月より続いています。センターの設立当初には、大勢の大学院生たちがデータベースの作成作業を担い、限られた時間で膨大な量のデータを作り上げました。今のメンバーには、この当時に参加していた者もいます。

その後、この時の作業のノウハウの上に立って、新たに公開される資料のデータの作成は専門の業者に担って貰い、これを実際に公開する際や公開した後のチェック作業を少人数編成の大学院生グループで行うという現在の体制に移行しました。平成17年4月には「アジア歴史資料センター調査員」という制度が整えられ、以来、作業グループは、正式にセンターの一員として、データベースの管理と維持を担っています。

センターで公開している資料は、分野や使用言語なども実に様々であり、私たち調査員は、それぞれの知識や技能を用いてお互いの作業を補い合っています。したがって、日頃から、作業中は調査員同士で実によくコミュニケーションをとっているのですが、つまるところ、これが大事なことなのです。たとえば、作業参加当時には、明治期の文書で用いられている崩し字の読解など、実は皆が得意としていたわけではありませんでした。しかし、こういったものに向き合うたびに、居合わせたもの皆で検討をしながら作業を重ねていき、ひとりひとりの技能を育ててきました。私たちは、たとえ自分自身の専門分野から離れたことであっても、知識を交換し合いながら、現場の作業を通じてスキルを磨いているわけです。

こうした作業環境のあり方は、調査員それぞれの歴史学研究にもより広い視野をもたらすことにもなっています。また、いわば日本におけるデジタル・アーカイブの最

先端であるこのセンターで作業に携わるという経験は、私たちが今後それぞれの研究の道を進んでいく上でも大きな自信となるでしょうし、たとえば海外の研究者の方々と接する際にも、誇りをもってこれを語る事が出来ると思います。

2. 調査員の作業——データベース管理

私たち調査員が担っている作業がどのようなものであるか、少々お話しさせて顶きたいと思います。主要な作業は大きく2つに分けられます。ひとつは、センターの肝とも言えるデータベースの管理作業で、もうひとつは、インターネット特別展の準備作業です。まず、前者についてご紹介します。

アジア歴史資料センターのアーカイブ(文書館)としての何よりも大きな特徴は、公開している文書、またそれらの文書の情報をまとめた目録ともに、デジタル・データとして管理されているということです。つまり、実際の文書や書誌カードなどを所蔵する通常の文書館・資料館と異なり、デジタル・アーカイブ(電子文書館)である当センターは、それらに相当するものとして、実際の文書をデジタル化したものである画像データ、文書の様々な情報を抽出して登録した目録データを集積して公開しているわけですから、これらのデータをしっかりと管理しなければ、文書館として機能し得ないのです。

データは現在の時点で既に膨大な規模となっており、この全体に常に目を配ることは容易なことではありません。しかし、これは何よりも大事なことだと考え、私たちは、利用者の皆さんからの様々な御指摘にも助けられつつ、データの改善に日々努めています。また、デジタル・データの管理については、当然それなりの専門知識や技能が求められるものですが、これについては、システムの設計・管理を担って頂いている業者の方々にいろいろと教えて頂きながら作業を進めています。

昨年秋の新規システム導入に当たっては、長期的な見通し、つまり今後もますます公開資料の数が増してゆくという見通しを踏まえた上で、これまでに培われてきたノウハウをいかしたかたちでシステムを設計して頂きました。特に、数の大きなデータを機能的に管理できるように、実際に作業に携わる立場から私たち調査員もいろいろと提案を行い、これを取り入れて頂くことができました。この新規システムでは、様々な外国語をはじめとするあらゆる種類の文字が入力できるようになるなど、これまでにじゅうぶんに対処できなかったことも可能となっています。また、旧システムから新システムへの移行は、データベース全体を改めて見直す機会ともなりました。こうしたことをうけ、私たちは現在、全体的なデータの質の向上に取り組んでいるところです。

3. 調査員の作業——インターネット特別展の準備

次に、これまでに3回に渡って公開してきているインターネット特別展の準備作業についてご紹介します。

インターネット特別展というのは、サイトを訪問された方々に対して、センターで公開しているさまざまな資料に接するためのきっかけを得て頂くために企画しているものです。あるテーマにしたがって資料をまとめてご紹介することで、たとえば、「教科書に載っているこの出来事は公文書によってこういう風に見えるのか」という実感を得て頂きたい、それをきっかけとしてさらにいろいろな資料を探して中を覗いて頂きたい、という意図が私たちにはあるのです。特別展を通じて、資料に接することをひとりでも多くの方に楽しんで頂ければ何よりです。

テーマは、多くの方々に関心を持って頂けるように、基本的には時宜に適ったものを選ぶようにしています。これまでは、日露戦争開戦百周年の2004年に『日露戦争特別展——公文書に見る日露戦争——』を公開しましたし、終戦六十周年を迎え、太平洋戦争、第二次世界大戦をめぐって改めて様々なことが問い直された2005年の末には、『公文書に見る日米交渉～開戦への経緯～』を企画し、いくつかの段階を経たかたちで公開してきました。こういったテーマ設定は、様々な方面で注目して頂くこととなり、新聞やテレビニュースで取り上げて頂く機会にも恵まれましたし、結果的にたくさんの方々がサイトを訪れ、ご意見も数多く寄せられました。

一方で、2005年初に公開の『公文書に見る岩倉使節団』は、近代日本の基礎の形成期である明治初期という時代を見てみてはどうかという発想にはじまっています。この時代の資料は、センターで公開している資料の中で最も古いものでもあります。その中から、国立公文書館所蔵の「大使書類」という資料群に注目し、これをもとに、当時のトピックとして取り上げられる



ことの多い岩倉使節団を追ってみようということでこのテーマが決定されました。さらに、この使節団を軸にして、同時代の世界各国の様子も、文化的な側面から垣間見られるようにしたいという意図も、企画には込められていました。

特別展の構成は、基本的に、基礎となる年表を用意して、時系列的に出来事を整理し、これにまつわる資料を紹介してゆく、という形式に従うことにしています。した

がって、テーマが決定されると、センターの公開資料の中から、中心となる資料——つまり、時系列的な整理を行う際にその骨組みとなるような資料——を特定して選択・整理しつつ、これと並行して基礎年表を作成して資料との組み合わせ方を考えていくことから作業を始めます。その一方で、こうした時系列的な資料の取り上げ方だけでは説明しきれない部分を補うために、それぞれの事項に関連する他の資料も探し出して、肉付けを行います。

このようにして実際に取り上げる資料が決定されると、必要に応じてそれぞれの解説文を執筆していきます。これは、利用者の方々がご自身で資料を読まれる際の補助として、あるいは資料の内容を簡単に把握して頂くための概要として役立てて頂く、という目的で用意しているもので、文書が難しい文字で書かれている場合などには翻刻を添えることもあります。また、中心的なコンテンツに盛り込むことはできなくても、本題の背景となるようなことや、その時代の様子を知るのに役立つようなことも、トピックスというかたちでいくつかまとめ、これも同様に資料を選定して解説文を添えます。

さらに、文字による資料だけではイメージも膨らみにくく、初めてサイトを訪れた方には接しにくいという印象を与えてしまいかねないので、可能な限り、画像資料を用いてヴィジュアル面での充実もはかろうと気をつけています。センター公開資料の中にも写真資料はたくさんありますので、その中から選び出すこともあれば、他の公共機関や新聞社などに御願ひして写真を使用させて頂く場合もあります。

以上のような準備作業を進める中で私たちが特に注意しているのは、センターの目的はあくまで資料を紹介すること、歴史上の出来事をリアルに捉えるためのツールとして資料を並べることのみであって、なんらかの歴史解釈を提示することではないということです。この姿勢は絶対に忘れてはならないことですが、やはり、もっとも難しいところでもあります。こういったことを考慮する上では、私たちが取り上げる出来事をめぐって、学術的に、あるいは政治的に、どのような議論が交わされているかについて最低限は把握する必要が出てくるため、近年のものを中心に、様々な文献、学術論文、そして新聞記事などもチェックするようにしています。それでもやはり、特別展をご覧になった方々から、センターでの資料の紹介の仕方が特定の歴史認識に基づいているのではないかとのご指摘を受けることは避けられませんが、正直なところを述べさせて頂けるならば、そういった疑問を抱かれた時点で、まさにご自身の目でしっかり資料を読んで、ご自身なりにいろいろなことを考えて頂きたいのです。そうして頂くことこそが、私たちの望みです。ある認識・解釈を示すことがセンターの役割なのではありませんし、ましてや何らかの見方を強要することなどあってはならないと私たちは考えています。

4. これから

アジア歴史資料センターが開設五周年を迎えた今、私たち調査員も、ここに至るまでの様々な蓄積を通じて、ようやく落ち着いていろいろな作業を進められるようになったかと思っているところです。またその一方で、これからよりたくさんの資料が公開されていき、今の私たちの知識や能力では追いつかない事態が次々と起こり得るであろうと考えれば、センターの歩みの中では、今の調査員の作業もまだほんの第一歩の段階にあるようにも思えます。

センターにおいて、常に最大の課題は、データの質と量の両立、ということです。年間の資料の公開スケジュールの中で、数多くのデータを用意し、そこに実用に耐える質を確保すること、具体的には、目録データをより正確なものに保ち、利用者が見たい資料画像に的確にアクセスできる状態にすることというのは、決して容易ではありません。これについては、これまで、そして恐らくこれからも、やはりいちばんの課題として、日々試行錯誤しながら全力で取り組まねばならないところでしょう。

近年、中国の研究者の方が当センターの資料を多く用いて研究を発表されるなど、デジタル・アーカイブというかたちで様々な資料を公開するセンターの意義は、国外においても認められつつあるようです。また、「アジア歴史資料センター」というその名にも明確に表されているように、当センターが、日本とアジア諸国との関係に大きな役割を果たすことは当然目指されるところでしょう。

こういった展望を前に、何よりもまず大切にしなければならないのは、より多くの方々に、出来るだけ容易な方法で、ありのままの資料に接して頂く、というセンターの原点とも言える理念です。この原点を大切にするためには、やはり、データの質と量を確保してゆくということが不可欠なのだと思います。これが立派に果たされてこそ、誰もが多くの資料を共有するということが可能となり、それを通じて、同じ出発点に立っているいろいろなことを語り合い認識し合うことが出来るようになるのではないのでしょうか。センターは、いわば、歴史をめぐる様々な対話の基礎を築く役割を担っているのだと考えます。

このように考えると、私たち調査員の毎日の作業は、本当に地道なものばかりでありながらも、その責任は常に大変に重いものなのだとつくづく感じますし、そのことを決して忘れてはならないと思います。しかし、これは同時に、大きな可能性を持った取り組みの一端を私たちも担っているということなのですから、おのずから情熱も湧いてくるものです。そんな情熱を秘めながら、私たち調査員は、利用者の皆さんから、「探していた資料を見つけることが出来た」「特別展が面白かった」「サイトが利用しやすい」という言葉を頂くことが出来るように、日々作業を進めているのです。